
下肢切断後に義足を作製し在宅血液透析(HHD)に移行した長期透析患者の1例

医療法人衆和会 長崎腎病院

○山口由希子 林 涼子 上谷しのぶ 原田孝司 船越 哲

【はじめに】

下肢の切断は機能低下に加え、足を失うという精神的な喪失感を伴う。これに対して義足作製は機能回復に加え、積極的な社会復帰への意欲をもたらす可能性がある。

【症例】

65歳男性、要介護4、妻と娘と3人暮らし。1993年に血液透析導入、その後腎移植にて一時透析離脱していたが、2016年9月に透析再導入となった。2017年5月閉塞性動脈硬化症にて血管外科を受診し、同年8月に右膝上で大腿切断術を受けた。術後は幻肢痛や外見上の劣等感で精神的に落ち込み、入院リハビリに消極的であった。在宅復帰のために義足を作製したところ外見的コンプレックスはなくなり、リハビリに意欲的に取り組むとともに、家族の協力のもと在宅血液透析の訓練を希望し、最終的に在宅血液透析に移行して退院となった。

【考察】

今回の症例では、義足作製によって歩行機能回復や外見的劣等感のみならず、社会復帰へのモチベーション向上が得られた。更に在宅血液透析という新たな目標を達成することができ、義足の意義は大きいと考える。